

参加を 支援するって どういうこと?



この冊子を読んで、
“参加”について
一緒に考えてみよう!

下京区では、世代を問わず単身世帯が増え、地域の住民同士のつながりが希薄化した現在では、様々な理由で家族やコミュニティとほとんど接触がない「社会的孤立」の状態に陥りやすい状態です。

「参加支援」とは、何らかの理由で、社会的孤立状態に陥ってしまった人、または陥りそうな人に対し、社会とのつながりを回復するための支援です。

既存の各制度で対応できない狭間のニーズに対応するために、参加が難しい方(ひきこもり、障害の疑いがある、対人関係が苦手な方)や社会とのつながりが希薄な方や経験が乏しい方など)に対し、本人のニーズと地域資源との間を取り持つことで社会とのつながりを回復することを目的に行っています。

参加が難しい方が参加しやすい活動は、既存の参加者にとっても参加しやすい活動になるのではないのでしょうか。

本リーフレットを通して、様々な人が参加しやすい活動のあり方について考えていく機会の一つとなれば幸いです。



あなたの活動を 参加支援にできるかも!?

特技を発見!

特技を活かして
講師や運営アシスタントで活躍!



事前準備や 片付けのお手伝い

活動への参加は
事業実施の間だと思いがちですが…
準備や片付けの協力も立派な参加です!



活動の場 来ることができなくても

活動日時と都合が合わなかったり
人が多いところが苦手な方には
場に参加しなくても参加できる方法を!

〈例〉活動で使用する材料の準備、
活動で使用する景品や備品の作成、
イラストや書道の提供など

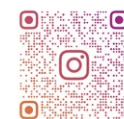


日常の活動

花苗の植替えで交流することで
相互理解を促進!



様々な参加支援を
本会Instagramで
紹介しています!



社会福祉法人 京都市下京区社会福祉協議会
下京区地域支え合い活動創出コーディネーター※

〒600-8166
京都市下京区花屋町通室町西入乾町292 京都市下京総合福祉センター内
TEL.075-361-1881 FAX.075-361-1663

※京都市が、地域で高齢者を支えていくために必要な生活支援サービスの創出や担い手の養成、ネットワークの構築を目的として、各区社会福祉協議会に配置しているコーディネーターです。

赤い羽根共同募金

このリーフレットは一部共同募金の助成金で発行しています。

受け入れ方はいろいろ! みんなで考えよう!



下京区社協
キャラクター
しもりゆうくん
かもがわさん

シモギョー流

参加の受け入れ方

社会福祉法人 京都市下京区社会福祉協議会 / 下京区地域支え合い活動創出コーディネーター

地域福祉活動に関わる人の裾野を広げよう!

活動の見直しポイント

ポイント1

参加しにくい空気はありませんか?

入りやすい雰囲気になっていませんか?
仲間内で盛り上がりすぎていませんか?

ポイント2

支援する人、される人と決めていませんか?

一方的に決めつけず、フラットな関係づくりを目指しましょう!

ポイント3

様々な人の力が活かされる場面づくりを検討しましょう

地域には様々な特技を持っている方がいます。課題や困難さを見るのではなく、その人自身を知ることからスタートしましょう。

参加する人はこんなことを思っています

お祭りのときに、マットやおもちゃが準備されていて参加しやすいな

趣味の園芸で地域活動に貢献できて嬉しい

「担い手」と「参加者」が同じテーブルを囲んで話をするので、気楽に参加できます

車いすでも参加しやすくなるといいな

フリートークは苦手なので、プログラムがわかると参加しやすいです

準備や片付けに参加してくれるのもありがたいです

地域活動に参加し始めて知り合いが増えました!散歩の途中でも話ができる人が居るのはいいなあ~

- 何をやる場所なのか明確にわかると参加しやすいです。チラシに当日のプログラムが記載してあったり、過去の活動の様子をSNSなどで見られると安心します。
- 自分が活動の場に居てもいいという雰囲気があると安心します。おもてなしされすぎると疎外感を感じます。自分はお客様で、仲間ではないと感じてしまいます。
- 自身の考えを否定せず、話を聞いてもらえると安心します。

参加までの経緯はいろいろ。でも「参加してよかった」という声をいただいています。

case 1

認知症の不安を抱えた 下京さん

物忘れが多くなり、不安を抱え閉じこもりがちになっていたが、専門職から、「一緒に行ってみませんか?」と声掛けがあり居場所に参加。最初は不安だったが、参加の回数を重ね、自身が同じ話を話したり、間違えることがあっても否定されず受け止めてもらうことができ、安心感が生まれ、話ができる人が増えてきた。活動の場以外でも話ができる人ができて喜んでいる。

case 2

発達障害を抱える 花屋さん

生きづらさを抱え、人とのコミュニケーションに自信が持てず、現在は失業中で昼夜逆転の生活をしている。家族が心配し、相談機関に相談し支援につながる。支援者との面談を通して居場所活動を知ったが、参加には至らなかった。支援者が様々な活動の写真を見せ、様子や雰囲気伝え、まずは、研修会や講演会、音楽鑑賞などのプログラムがある日から参加してみることにした。

case 3

不登校からひきこもりがちになった 室町さん

不登校から、社会経験を積むことができず、同年代や大人と会話することに苦手意識を持っていた。居場所に参加することには消極的で、事業実施前後の準備や片付けを手伝うようになった。運営者からは、「いつも丁寧に作業をしてくれてありがとう!」と感謝され、「誰かの力になっている」と感じ、今後はもう少し人と関わる活動に参加してみようかなという気持ちに変化が生じている。

